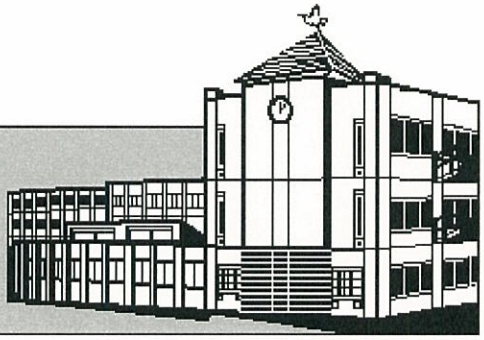
敬和学園大学の学生・教職員と図書館を結ぶ

# 図書館だより



1998年4月　準備4号（新入生歓迎号）　　編集・発行　敬和学園大学図書館

若者が本を読まないと言われるようになって久しい。 しかし若者ほど何か未知なものを求めている人たちもいない。 制度で決められた教科課程に縛られて、書物の「本物」の魅力に気づかなかったのであろうか。 その点大学はちがう。 どの学問分野でも、これまで人類が積み上げてきた知の遺産ともっとナマの形で触れ合うはずである。 図書館が本物との出会いの機縁となれるように。 そうした期待をこめてこの特集を贈る。

## 古典は「情報」か？

学長　北垣　宗治

このたびの増築と新築により、敬和学園大学図書館のスペースが一挙に倍増したことを心から嬉しく思います。この次の機会にはもう増築でなく、独立した図書館棟を建てることになりますが、それは二十一世紀の後継者たちにお願いしなくてはなりません。

あちらこちらの大学ではそろそろ「図書館」の機能を拡大して、「学術情報センター」などと呼ぶようになりました。 たしかにいまやインターネットの時代であり、マルチメディアの時代です。 電子機器を活用して、実に多くの情報が入手できるようになりました。 私が二十年前に、ジョイ・ウイリアムズ先生のお父さんのフィリップ・ウイリアムズ教授と共同研究したときの成果である「『ガリバー旅行記』と日本」 という英語論文なども、いまではインターネットで読むことができます。それもアメリカの見知らぬ学者が、私たちの了承のもとにインターネットに入れてくれたのです。

にもかかわらず、私は古い人間のせいか、この学術情報センターという表現になじめません。 たとえば聖書とか、プラトンの全集とか、シェイクスピアの作品集は「情報」でしょうか。 とんでもない、それは古典であって情報ではないのです。それらは人類の知恵に参入するための、そして人間としての生き方やものの見方を学ぶための知恵の源泉であって、今日は有効であるが、明日になれば価値を失うような「情報」ではないはずです。 たしかに現存の政治家の略歴といったような情報も貴重であり、必要ですが、しかし図書館の第一義的な目的は古典や歴史、文学、哲学などの、重要な、標準的な書物を揃えて、学生や教職員の使用に供することでなくてはなりません。

マルチメディアが発達すると、書物はなくなると予言した人もいましたが、人間の目は液晶画面と十時間ぶっとおして付き合えるように出来ていないというのが私の結論です。

## 少年の頃の読書

田原　嗣郎

私は中学二年生のとき、千葉県の御宿という町ではじめて自分の小遣いで本を買いました。中学の臨海学校に参加して七月の終りの十日をそこの実科女学校の校舎で過ごしたときのことです。その本は岩波文庫で夏目漱石の『坊ちゃん』、値段は星一つつまり二十銭でした。なぜ『坊ちゃん』を買ったのかは覚えていませんが、小遣いというものを初めて持って、自分の裁量で本を買ったということが新鮮だったものですから、このことははっきり覚えています。

今度、若い頃の読書について何か書いてみるようにいわれました。若いといってもいろいろな時期があります。大学にはいって専門書にとりつくようになった時期のことは別に書いたので、中学生だった頃のことを思い出してみました。その頃、私が読んだものを思い出してみると、日本の古典では『玉勝間』『平家物語』『太平記』『神皇正統記』『徒然草』などがあり、漢文では『日本外史』『十八史略』『孟子』などがあるのですが、実はこれらは教科書だったのですから、自分で読んだとはいえず、それに抄出されたものに過ぎません。全文を読んだのは芭蕉の『奥の細道』と『甲子紀行』だけで、それも楸邨の俳号をもつ加藤先生が岩波文庫を教科書にして使用されたから読んだのです。ヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』や『九十三年』、ディッケンズの『オリバー・トゥイスト』などの分厚い本を、もちろん翻訳で、夏の暑いときに寝転んで読んだりはしました。刺激の強かった場面は頭に刻み込まれてもいますが、なにしろ寝転んで読んだのですから、読書の経験といわれると挙げるのに躊躇します。

中学も三年生くらいになると生意気になってきます。英語も教科書ばかりでは面白くないというので、まず読んだのは“Little Lord Fauntleroy”です。これは筋書きは知っているというので読んだのですが、黒人女中の英語が妙なものだったということくらいしか覚えていません。次は Conan Doyle の “Lot No249” で、これは研究社の小英文学叢書で読みました。『ミイラの怪』という訳名につられて読んだのですが、sarcophagus（石棺）という妙な単語を覚えているのはそのおかげです。これらのものは殆ど中学三年生の時に読みました。四年生からは受験参考書ばかりが対象になったのです。

これまで自分では中学生のときにもかなり本を読んだような気持ちを持っていましたが、今回思い出してみて、中学時代の読書の貧困さには自分でも驚きました。本当に恥ずかしいことです。

（日本思想史）

## 言葉を心に貯える

延原時行

読書はなんのために必要なのか、ときかれたら、私はなんの躊躇もなく「それはいざという時のために心に言葉を貯えておくためだ」と答える。いざという時のために貯えた金銭は、人の独立を助けてくれる。人品の劣る人に膝を屈しないために金銭は必要なのだ、と言ったのは内村鑑三であるが、それは本当である。しかし、もっと重要なのは、心に言葉を貯えることなのだ。これも私は若き日内村から学んだ。

人間の精神は裸のままでは、実に弱い。精神に活きた言葉を注入し、貯えてやらねば、これほどもろいものはない。『文藝春秋』三月号に「少年A検事調書」が掲載され、ただでさえ不況と金融不祥事で萎えている平成の人心に衝撃を与えた。同四月号がその「衝撃」についての識者の所感を特集しているので、関心のある人は読んで欲しい。ただ私が言いたいのは、酒鬼薔薇少年が自分の魔物性をチェックするためにどのような「言葉の貯え」もした経験のない様子だということだ。これが彼の魔物的行為の元凶である。

思えば、この国は明治維新以来の百数十年間「言葉を貯える」教育を無視して来た。その結果がこれである。続出する官僚の事件についてもこの点どうか？

私自身のことを振り返って言うと、中学時代は叔父の本棚に見つけたキェルケゴールの小品『野の百合・空の鳥』に育てられたように思う。弘文堂のアテネ文庫に入った 60 頁程の説教集だが、なにげなく手に取って読み出して惹き込まれた。野の百合と空の鳥の沈黙と神への服従、そして歓び

---

ひとつひとつ心に刻み込むような文章に打たれた。そして決定的なのは「歓びとは、自己自身に対して現在的であることである」という一節である。今の自分を百合や鳥のするように受け容れることを初めて学んだ。私が聖書の言葉に親しみ出したのは、キェルケゴールのこの小品のお蔭なのである。

日本は今、その国の炉心が熔けてしまうのではないか。心に言葉を貯えてこそ、学問はその再確認のいとなみとして各種の分野で創造的に花開くのである。（哲学）

## アメリカ文学との出会い（？）

松崎　洋子

小学生の頃から本が大好きでした。テレビもない時代のことですから、そんな子供はどこにでもいたと思います。『秘密の花園』であろうと、『王子と乞食』であろうと、『赤毛のアン』であろうと、とにかくお話であれば夢中になって読んだものです。シュヴァイツアー博士の伝記よりも『怪盗ルパン』の方が気に入っていたのは、読みながら自分の中で想像をいくらでもふくらますことができたからかもしれません。登場人物になりきって、トム・ソーヤと一緒に冒険をしたり、ジャン・バルジャンのように悲惨な目にあったり、本の世界に没頭すれば、子供でも本当にいろいろなことが経験できます。私の場合、どんな物語でも一気に読んでしまうことはあまりなく、想像の世界に少しでも長くとどまりたくて、終り近くになると、ぐずぐずと引きのばすことがよくありました。

学校の図書館で借りたり、親に買ってもらったりして、好きではありましたが、いわば「文部省推薦」の本を読んでいた中学２年の時に、突然クラスメートがまったく違う種類の読み物を学校に持ち込んだのです。それはアメリカのハイスクール生活を描いた「学園物」の翻訳本（らしきもの）でした。今思えば、ハーレクインのティーンエージャー版とでもいうような本だったのですが、あの時、彼女が持ち込んだのは、実は本というよりも、自分たちと同世代の若者がいる等身大のアメリカというまったく新しい世界だったのです。

このハイスクールシリーズはまたたく間に校内で大流行し、私もその虜になってしまいました。「パーティ」、「デート」、「キス」といった同年代の生徒の行動はむろんのこと、親や先生との関係など、すべてが新鮮でしかも身近に感じられ、大袈裟にいえば、私の中で初めてアメリカという国が生き生きとした姿で現われたような感じすら持ちました。

このシリーズに刺激を受け、私も書いてみようと、タイトルは忘れましたが、ヘンリックス・スタフォードなどという名前をつけて、彼をハンサムでやさしい主人公に仕立て上げ、最初の数ページを友達に見てもらったりしたものです。後が続かず、第一章も書き終わらないうちに挫折し、私の作家になる夢もはかなく消えました。

自分が納得するようなかたちでアメリカ文学に出会ったのは大学に入ってからですが、あの本を読んだときの驚きとどこかで繋がっているような気がしてなりません。（アメリカ文学）

## 国際社会をみる眼

齋藤　祐介

『ピースメーカー』、『セブン・イヤーズ・イン・チベット』、『ニクソン』、『シンドラーのリスト』、『いまそこにある危機』、『ロシア・ハウス』、『パトリオット・ゲーム』、『ＪＦＫ』、『レッド・オクトーバーを追え』……映画館に足を運んだり、レンタル・ビデオなどを通じてこうした映画に接したことのある学生諸君は何人いるでしょうか。これらはいずれも現在の国際社会の抱える問題や、歴史的に重要な事件をテーマとしたフィクションまたはノンフィクションの作品で、原作がすべて日本語に翻訳され出版されています。

国際社会の性質やそこで起こっている政治・経済現象などを研究する学問を、一般に「国際政治学」や「国際関係論」と言います（最近では「国際関係学」や「国際学」と呼ぶ人もいます）。こうした学問の対象は主に外国のことですから、何となく縁遠く感じたり、理解するのが難しいと思われるかもしれません。けれども、最初に挙げたいくつかの映画も、同じように国際問題を扱っていながら多くの観客を集めています。しかもそうした映画を観たりその原作を読むことで、国際社会のしくみやはたらきを理解するうえでの重要な知識やヒントが与えられたり、国際関係をとらえるセンスを養うこともできるのです。この文章を書いている私も、学生時代から多くの国際政治小説やスパイ・スリラーを読んできました。

学問を始めるうえでもっとも重要なことは、研究対象を「好き」になることです。話題になったり評判の高い小説やノンフィクションを読むことから、国際社会について考え始めることも面白いかもしれません。最近のものではトム・クランシー(田村源二訳)『合衆国崩壊』(新潮文庫、1997 年)を薦めます。そしてこうした問題への興味や関心が大きくなったら、まず高坂正堯『平和と危機の構造　ポスト冷戦の国際政治』(NHK ライブラリー、1995 年：図書館請求記号 319-KO)を読んで下さい。この本は、現在の国際問題を理解する大きな枠組みを与えてくれる良質の入門書です。（国際政治学）

## 21 世紀へ向けて－自然科学の分野から

菅野　浩

あとわずかで 20 世紀も終わろうとしている。20 世紀は人類にとってどんな世紀だったのだろうか。幾度かあった大きな戦争も核兵器の出現で影をひそめたかにみえる。顕著なことは、科学技術に支えられた経済社会の大発展であろう。20 世紀初頭とくらべると、物質文明のあまりにも著しい進歩に驚かされる。かくてわれわれは現在豊かで快適な物質生活を享受している。この調子でゆくと、来たるべき 21 世紀はさらにどんな快適な生活が待っているのであろうか。

しかし、豊かな物質文明追求へ向けての工業の大発展により汚染物質の排出が急増し、地球温暖化、酸性雨、オゾン層破壊、放射性廃棄物などの地球規模の環境問題が切実になってきている。また、科学技術の進歩による食糧の増産と医療の普及で、人口は爆発的に増加し、物質やエネルギーの多量消費に伴って各種資源の欠乏も顕在化してきた。

いま直面しているこのような問題は、未だかって人類が遭遇したことのない問題である。21 世紀において人類が力を合わせて解決のための方策を実行できない場合は、人類は生存に関わる重大な危機を迎えることになるだろう。

20 世紀後半にみられるもう一つの顕著な出来事は、生命科学の急速な進歩とそれによってもたらされた生命倫理的問題である。生命科学は本来生命現象の究明を通して自然界の摂理を見いだそうとする学問で、哲学、文学、芸術などと同様人間を考える知的活動の一つである。近年遺伝子やバイオテクノロジーの分野が非常な発展をとげ、生命観や人間観に大きな影響を与えつつある。脳死、臓器移植、遺伝子操作、受精卵操作、クローン動物、遺伝子診断などは 20 世紀の終わりにきて人々の目に触れるようになった生命倫理的問題であり、21 世紀に入ってからさらにどのように展開してゆくであろうか？

すでに 19 世紀末、フランスからタヒチに移り住んだ画家ゴーギャンは“Where do we come from? What are we?　Where are we going?”というテーマの大作をえがいた。21 世紀を迎える人類が、いま 20 世紀をふりかえりながら深く考えるべきテーマである。そこでは自然科学と人文・社会科学の総合化が不可欠であり、人間の徹底的理解が必要であろう。（生命科学）

参考図書：

1．北大環境科学研究会編『展望 21 世紀の人と環境』（三共出版）
2．中村桂子著『生命科学と人間』（日本放送出版）

## 外国語科目を学ぶこと

上野恵美子

本学は開学時から外国語教育に重点を置くことを特色のひとつとしてきましたが、1995 年度からカリキュラムを改定し、より一層の充実を図っています。その特徴は、①第一外国語を必修とする、②達成目標にしたがって三つのレベルを設定し、レベル I を必修とする。英語については各自の履修すべきレベルをプレイスメントテストによって決定する、③各レベルに「読む」「書く」「聴く」「話す」の４つのコースを設定し、その他にオプション・コースを開講すること、です。具体的な内容や履修のしかたはシラバスに詳しく書かれていますし、ガイダンスで説明も行ないますので、ここではその背景にあることについて書こうと思います。

日本人の外国語志向（殊に英語へのあこがれのような気持ち）はかなり強いと思いますし、本学

が外国語教育を重視していることを知って入学してきた方も少なくないと思いますが、「語学力をつける」とはどのようなことでしょう。理解し、表現できること—外国語を読んだり聴いたりして逐一母語（この文章の読者のほとんどの人にとっては日本語）の単語に置き換えなくても内容がわかること、そして母語の文を外国語の文に置き換えるということではなくて外国語でまとまった内容を書いたり話したりできること。こういった能力のことをスキル（技能）と言いますが、外国語科目の学習で行なおうとしているのは、このスキルを習得することです。これを効果的に行うためのカリキュラム、達成目標、授業内容、教材、評価方法を私たちは用意しています。

スキルの習得について触れましたが、では、理解し表現するというけれど、何を理解し何を表現するのでしょう。道で出会った人の「やあ、どちらへ」「ええ、ちょっとそこまで」というやりとりにはほとんど情報価値のある意味内容は含まれず、仲間意識の維持のようなものもまたことばの重要な役割のひとつではありますが、ことばの重要な役割は、やはり、情報伝達でしょう。そしてそのためには伝えるべき「内容」がなければなりません。よく「英語をぺらぺら話せるようになりたい」などと言いますが、話す内容がなくてぺらぺら話すわけにはいきません。母語で理解できないこと表現できないことが、外国語で理解でき表現できるわけはないのです。私たちは学習者が内容に興味をもてる教材の選定をするように留意していますが、外国語科目の外で、他の科目はもちろん、私たちをとりまく世界のさまざまなことに関心をもって、自らの世界を豊かにしていくことがとても大切です。

スキルとしての外国語は、さまざまな分野で使用されます。英語英米文学科・国際文化学科どちらの学生にとっても、専門科目の学習において外国語の力は重要な意味をもつのです。　（英語学）

**新着図書**

＜和書＞

芦部信喜「岩波コンパクト六法　1998年版」◆濱下武志他「地域の世界史1・2・10」◆愛新覚羅溥傑「溥傑自伝—『満州国』皇弟を生きて」◆小松久男他「岩波講座世界歴史21」◆総合女性史研究会編「日本女性史論集 5」◆家永三郎「家永三郎集5」◆野家啓一他編「岩波新哲学講義4」◆福原泰平「ラカン—鏡像段階」◆イマニュエル・ウォーラーステイン「叢書世界システム 2　長期波動」◆福田歓一「福田歓一著作集1・2」◆菅野和夫他「岩波講座現代の法12」◆ゴドウィン他「ユートピア旅行記叢書2」◆山中裕他校注・訳「新編日本古典文学全集　33　栄花物語(3)・25　源氏物語(6)」◆青木和夫他校注「新日本古典文学大系16・82」◆吉川幸次郎「吉川幸次郎全集 5」◆鳥越文蔵他編「岩波講座歌舞伎・文楽5」◆角井博監修「故宮博物院10」◆青木康征「海の道と東西の出会い」◆アンドレーア・アロマティコ「錬金術—おおいなる神秘」◆ガバン・マコーマック「空虚な楽園—戦後日本の再検討」◆福永文夫「占領下中道政権の形成と崩壊—GHQ 民政局と日本社会党」◆教科書検定訴訟を支援する歴史学関係者の会「歴史の法廷—家永教科書裁判と歴史学」◆ニール・サイモン「書いては書き直し—ニール・サイモン自伝」◆八木哲郎「天津の日本少年」◆ドミニク・ボナ「ガラ—炎のエロス」◆加藤博「アブー・スィネータ村の醜聞—裁判文書からみたエジプトの村社会」◆藤井省三「魯迅『故郷』の読書史—近代中国の文学空間」◆大野健一他「東アジアの開発経済学」◆朽木昭文他編「テキストブック開発経済学」◆久米あつみ「カルヴァンとユマニスム」◆E・カッシーラー「ジャン=ジャック・ルソー問題」◆R・クリューガー「生きつづける」◆佐藤和明「少年は見た」◆藤原昭夫「福沢諭吉の日本経済論」◆秦辰也他「体験するアジア—ボランティア夫婦の日本・タイ共生論」◆三上隆三「貨幣の誕生」◆守屋善輝「英米法諺」◆芦部信喜「憲法学Ⅰ・Ⅱ」◆同「憲法判例を読む」◆同「憲法叢説 1~3」◆シドニー・D・ベイリー「国際連合」◆中川淳司「資源国有化紛争の法過程」◆山本草二「国際法」◆奥平康弘「憲法裁判の可能性」◆E・M・フォースター「ある家族の伝記—マリアン・ソーントン伝」◆森本忠夫他「ロシアは何をつくったか」◆新井佐和子「サハリンの韓国人はなぜ帰れなかったのか」◆井上浩一他「世界の歴史 11」◆長尾真他「岩波講座言語の科学 9」◆川田順造他編「岩波講座開発と文化 1・6」◆坂口謹一郎「坂口謹一郎酒学集成5」◆柳田國男「柳田國男全集12」◆大塚初

重他編「考古学による日本歴史 2･5･9･10･15･16」◆新崎盛　他監修「琉球･沖縄写真絵画集成 1~5」◆下川浩一「日米自動車産業攻防の行方」◆長倉三郎他編「岩波理化学辞典　第５版」◆鈴木俊一「回想･地方自治五十年」◆緒方竹虎「一軍人の生涯―提督･米内光政」◆末原達郎編「アフリカ経済」◆金田章裕「オーストラリア景観史―カントリータウンの盛衰」◆星野智「世界システムの政治学」◆中島秀人「ロバート･フック―ニュートンに消された男」◆舟田詠子「パンの文化史」◆高島忠義「開発の国際法」◆有倉遼吉他編「条解日本国憲法　改訂版」◆伊藤知義「ユーゴ自主管理取引法の研究」◆古野豊秋「違憲の憲法解釈」◆浅野一郎編「必携法令難語辞典」◆北村泰三「国際人権と刑事拘禁」◆田畑茂二郎「国際化時代の人権問題」◆白石太一郎「シンポジウム日本の考古学 4」◆村田静子他編「福田英子集」◆L･L･パシネッティ「構造変化の経済動学―学習の経済的帰結についての理論」◆杉村和子他監訳「女の歴史 5」◆梶原景昭他編「岩波講座文化人類学 13」◆木村汎「国際交渉学―交渉行動様式の国際比較」

＜洋書＞

Papke, Mary E., Verging on the Abyss: The Social Fiction of Kate Chopin and Edith Wharton; Croft, Robert W., Anne Tyler: A Bio-Bibliography; Mussel, Key, Women's Gothic and Romantic Fiction: A Reference Guide; Shinn, Thelma J., Women Shapeshifters: Transform- ing the Contemporary Novel; Pearlman, Mick-ey, Mother Puzzles: Daughters and Mothers in Contemporary American Literature; Payant, Katherine B., Becoming and Bonding: Contem-porary Feminism and Popular Fiction by A- merican Women Writers; Arnold, Marilyn ed., A Reader's Companion to the Fiction of Willa Cather; Champion, Laurie ed., The Critical Response to Eudora Welty's Fiction; Shapiro, Ann R., Unlikely Heroines: Nineteenth Cen-
tury American Women Writers and the Wom-
an Question.

＜寄贈＞

新潟県水産海洋研究所「平成８年度『ナホトカ』重油流出事故に係る沿岸地域環境影響調査報告書◆牧英正「人身売買」◆尾川正二「文章の書き方」◆J･M･グラネロ「キリストと語る 2･3」◆H･ティーリケ「教会の苦悩 ―説教に関する私の発言」◆井上洋治「日本とイエスの顔」◆田中伸尚「大正天皇『大葬』―『国家行事』の周辺で」◆C･E･ジェファーソン「教会の建設」◆W･トロビッシュ「愛と性の悩み―アフリカの青年と牧師の間に交わされた手紙」◆近藤馨「遠い越佐の海―近藤馨評論随想集」◆小川武満「平和を願う遺族の叫び」◆鵜飼勇「神偕に在せば―牧会三十年記念」◆ダニエル･フレミング「世界は一つに」◆高橋三郎「教会の起源と本質」◆由木康「神の前に立つ人間―講解･ローマ人への手紙」◆X･レオン=デュフール「イエスの復活とその福音」◆宍戸寛･峰子「よみがえる島の教会―信徒伝道者夫妻『大島だより』の五年」◆浅見定雄「聖書と日本人」◆喜多川信「歴史化の神学」◆西川博彬「生きる道を探して―キリスト教信仰生活入門」◆ライズィ「言葉の作法―あるいはどのように、何を話すべきか？」◆田中幸子「ことばの花束―言語の多様性と普遍性」◆遠藤三郎「日中十五年戦争と私―国賊･赤の将軍と人はいう」◆春風イチロー「エドガー･バーゲンとロゴス」◆R･C･トレンチ「主の奇跡」◆丹羽　之「往く所を知らずして」◆同「信仰を遺産として」◆広田貞吉「佐渡と佐渡人」◆アンセルモ･マタイス「性の進歩と愛の調和」◆榊利夫他「公明党･創価学会批判」◆田上太秀「禅の思想―インド源流から道元まで」◆荻原晃「青年に問う」◆新潟県立近代美術館他編「シカゴ美術展―近代絵画の 100 年」◆土肥昭夫他編「天皇の代替わりとわたしたち」